

コロナ渦を経た社会は「元に戻った」のか

思えば、社会は「壊れる前の状態」に人を押し戻そうとする。リハビリの目標も「元の生活に戻る」であり、キャリアの復帰も「元のポジションへ戻る」である。しかしながら、壊れた人間にとって、それは二度と叶わぬ願望だと言ったら、厳しすぎるだろうか。

戻れないことを前提に生きる、その思想こそが重要なのではないか。壊れたあとを「終わり」ではなく「始まり」として捉え直すこと。そこからしか、新しい物語は始まらない。

「壊れたあとに残った心と身体」と共に歩む日々は、常に制約だらけである。疲れやすく、少しの無理が利かない。だが制約があるからこそ、別の工夫が生まれる。感じやすさを武器にすること。小さくても自分で立つこと。そうした選択は、壊れたあとを生きる者にとっての「生存の技法」である。

だからこそ私は言いたい。壊れたあとの人生は、元に戻れないという意味での「敗北」ではない。それはむしろ、戻れないことを引き受け、新しいかたちで自分を生き直す挑戦である。私は壊れた。けれど、壊れたままの私だからこそ、見える世界があり、語れる言葉がある。ひょっとしたら、コロナ渦を経て、私たちの社会も元に戻ったのではなく壊れたままなのではないか。これが「壊れたあとを生きる哲学」の出発点である。